No more A than B 構文の意味と機能

−「クジラ構文」とはいかなる構文か−

廣田篤（金沢大学［院］）

いわゆる「クジラ構文」は、以下の例文(1)をその代表例として、少なくとも日本においてはよく知られている。

(1) A whale is **no more** a fish **than** a horse is.（ウマが魚でないのと同様、クジラは魚でない）

この例では、many/much の比較級である more に後続する要素が名詞句（a fish）である点において、際立った特徴が見られる。従来の先行研究では、「クジラ構文」の定義が必ずしも明確ではないため、本論においては、more に名詞句が後続するタイプの構文を「狭義のクジラ構文」として定義する。「狭義のクジラ構文」は「〜でないのと同様、〜でない」の意味を表すが、この意味になるのは more の後ろに NP をとる場合のみに限定されない。No more A than B 構文には、以下の表に示すように、統語形式上様々なヴァリエーションが見られる。そこで「狭義のクジラ構文」と意味的に類同的なものを一般に「クジラ構文」とみなし、意味変化を経たと思われる例はその拡張例として捉える。「狭義のクジラ構文」と「クジラ構文」は構文スキーマである No more A than B 構文の事例だが、それ以外に拡張例が存在し、そうした拡張例も No more A than B 構文の事例として捉えられる。本論では共時的な観点から、実際に No more A than B 構文にはどのような事例が見られるかを提示し、「クジラ構文」の特徴を示した上で、「クジラ構文」の拡張例まで包括した No more A than B 構文の意味と機能を明らかにする。

コーパス（BNC）を利用すると、No more A than B 構文は以下のようなタイプにおおよそ分類可能である[1]。

Type [A の要素]	Token Frequency	特徴
①Adj / Adv	374	ほとんどが Adj
②NP	230	Adj+Noun を含む（Noun が主要部）
③VP	87	M(modal) no more V を含む（M がある方が多い）
④PP	35	in/to/of/from/by/for/about/on/at など
⑤その他	27	to 不定詞や動名詞、接続詞 however など

それぞれのタイプの例文を以下にいくつか挙げる。

[①の例](2) James Dewar argues that smoking cannabis should be **no more** <u>criminal</u> **than** watching TV.

(3) I was almost certain that she had been to the British Museum **no more** <u>recently</u> **than** I had myself.

[②の例](4) There is **no more** <u>dangerous a condition</u> **than** that of boredom.

[③の例](5) We **no more** <u>understand</u> how biology emerges from physics **than** we understand how classical measuring apparatus emerges from quantum mechanics.

(6) I **no more** <u>believe</u> in destiny **than** you apparently do.

(7) He <u>could</u> **no more** <u>understand</u> what went on in a twenty-year-old's head **than** fly to the moon.

[④の例] (8) The underground man's heart is **no more** <u>in being idle</u> **than** in anything else, however much, as he himself puts it, he "wants to want."

(9) She spends **no more** <u>on clothes</u> **than** 12 months ago and still fills in her pools coupon every week.

（(9)では厳密には、more は名詞として働いているが、統語形式上、④前置詞句の分類の中に含めている）

「狭義のクジラ構文」は②に含まれる。More は本来的には many/much の比較級であるため、①のタイプが最も生起頻度が高いのは妥当な結果であり、また、③のタイプの No more A than B に対して、more A than B の形式で A に VP をとるものを検索すると、VP として働いているものは存在しないことが判る。

次に、No more A than B 構文をどのように捉えたらよいのかを、構文的形態論の知見を基にして示したい。構文的形態論では、例えば unhappiness の語形成を(10a)や(10b)ではなく、(11)の見方で捉える（X は Adj の happy に対応）。

(10a) $[[[un][X]]_A[ness]]_N$　　(10b) $[[un][[X]_A[ness]]]_N$

(11) [un [X]$_A$ ness]$_N$

つまり、形容詞 happy に形態素 un-や-ness が同時に付加し、happiness という語（名詞）が形成されると捉える。各形態素を語に見立て、構文分析に応用するならば、No more A than B 構文もその分析可能性について、(12)や(13)ではなく、(14)の見方で捉えることができる。先の議論において、more A than B の形式で A が VP のタイプが存在しないことに言及したが、その意味でも、No more A than B 構文を(14)のように捉えるのが妥当であるといえる。

(12) [[no][more [A]][than [B]]]　　(13) [[no][more [A] than [B]]

(14) [no more [A] than [B]]

(13)の解釈は、平沢(2012)で提起されている「差分スロット」[2]を満たす要素が no（つまり、ゼロ）であるという見方を反映している。平沢(ibid.)は(1)を「クジラが魚である蓋然性は、ウマが魚である蓋然性（＝0%）よりも上であると思っているかもしれないが、それは誤りであり、前者が後者を上回っている差分はゼロである」と解釈しており、これはまさに(13)の見方を反映している。こうした意味論的な解釈、つまり「クジラ構文」の通常のイディオム的な意味解釈の限界を示すものとして、平沢(ibid.: 52-53)は以下の例を取り上げている。

(15) Nuclear weapons are **no more** a threat to the world **than** an epidemic of bacteria spreading.

核兵器は誰にとっても脅威であることは自明であることから、(15)を否定的に解釈するには無理がある。そのため平沢(ibid.)は、こうした形式上は「狭義のクジラ構文」に属するタイプを、「先行命題が真であるのと同様、後行命題も真である」の意味であると規定し、意味的に別のタイプに分類している。それ以後の先行研究は、主にこうした意味解釈の仕方をめぐって展開し、特に本多(2017)では、「No more A than B 構文には少なくとも３つの解釈がある」と主張される[3]。

本多(ibid.)では、「前件否定」「前件抑制」「後件指摘」の３つのタイプに「No more A than B 構文」を分類している。前件とは than より前の命題、後件はその後ろの命題のことである。「前件否定」は「クジラ構文」に対応し、残りの２つは以下の通りである。

(16) President Obama says marijuana use is **no more** dangerous **than** alcohol, though he regards it as a bad habit he hopes his children will avoid.（…マリファナの使用が危険だとはいってもそれはせいぜいアルコールが危険なのと同じ程度だ…。）

(17) Does she --- have a husband? She is very beautiful." Female intuition was a remarkable thing. "Yes. She does. And she is **no more** beautiful **than** you, Anne" I meant it sincerely but she waved away the compliment.（「あの人…旦那さんいるのかしら？　とってもきれいな人よね」　女性の直観というのはすごいものだ。「ああ、いるよ。で、確かにあの人はきれいだけど、アン、君だって負けてないよ」…。）

本多(ibid.)の主張の核は、「事前想定」に見られる命題の蓋然性の差に関して、後件を基準として前件をその水準まで「下げる」のか、あるいは前件を基準として後件をその水準まで「上げる」のかという認知操作の差異があるだけで、「No more A than B 構文」は本質的には前件と後件の蓋然性の差がゼロであることを述べているだけである、という点である[4]。廣田(2018b)では、本多(ibid.)で示された(1)(16)(17)の例のそれぞれについて意味構造図を記述している。それが以下の図１から図３（一部改）である。意味構造図の上でも、本多(ibid.)の３つのタイプの特徴を捉えることができるが、重要なのは、事前想定とその高低の差がゼロになることであり、そこで次に問題になるのは事前想定における各命題の捉え方、そして No less A than B 構文との差異である。というのは、No less A than B 構文も前件と後件の蓋然性の差がゼロになることを表す一方で、事前想定の構図が No more A than B 構文と対照的であるからである。

No more A than B 構文は、意味論的には、前件と後件の間の「差分がゼロ」であることを言明するのに過ぎないが、後件に「ウマは魚である」のような蓋然性がゼロの命題が選ばれると、前件の蓋然性も実はゼロであるというレトリックが成立し、そうした機能を持つイディオム的な構文を「クジラ構文」の意味的なプロトタイプとして規定できる。事前想定に関して、(1)は後件の蓋然性がゼロ、(15)は前件の蓋然性が 100 であるという違いはあるが、その差異は本多（2017）のいう「認知操作」の作用する方向性の差異として構文の意味解釈に反映する。

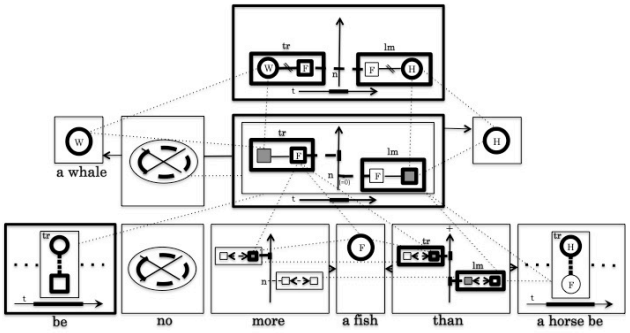

図 1

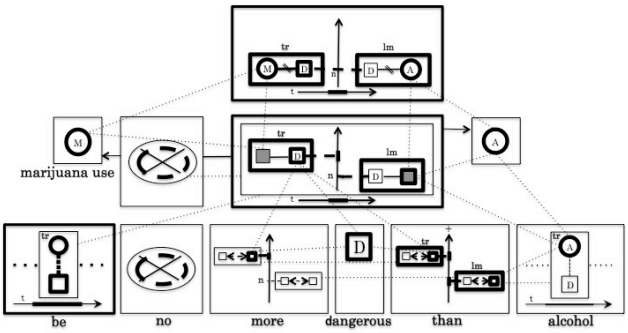

図 2

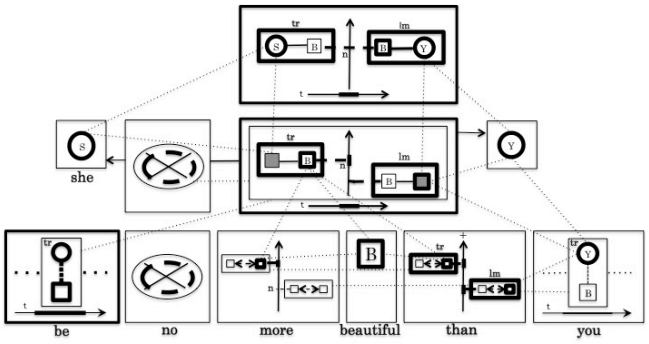

図 3

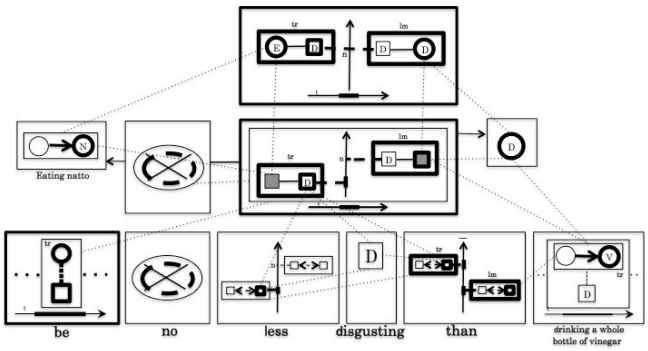

図 4

本論では、(14)で見た[no more [A] than [B]]というチャンクは２つの命題の蓋然性の間に差がないことを表す標識であり、構文としての意味は[A]や[B]で提示される内容（命題）の蓋然性を認知主体がどのように捉えるかによって決まると主張する。そうすると、No more A than B 構文の意味解釈の鍵となるのは、[A]や[B]で提示される要素に対する捉え方である。「ウマが魚である」という命題の蓋然性はゼロ、あるいは「原爆は脅威である」という命題の蓋然性は 100 であるという「認知」に支えられて、はじめて構文をいくつかの意味解釈のパタンの中から適切に理解することができる。

構文の意味が[A]や[B]で示される要素に対する「認知」で決まることは、以下のインフォーマントによる 3 つの作例（とその他）から明らかである[5]。それらはいずれも、平沢(2012)や本多(2017)の例とは異なるタイプである。

(18) Looking at myself in the mirror is **no** easi**er than** staring into the sun.

この例の事前想定は「クジラ構文」の場合とは異なり、前件と後件の蓋然性は共にゼロであり、鏡で自分の真の姿を捉えることの難しさをレトリックとして表す文として解釈される（ただ、こうした蓋然性に対する認識は「百科事典的知識」に依拠するだけでなく、「個人差」もある。話し手にとっては前件の蓋然性はゼロでも、聞き手はそうではないと思っているからこそ、(18)は意味を持つのかもしれない。しかし yourself ではなく、myself として話し手が文中に現れる点において、文脈がなければ一義的な解釈は難しい）。結局(18)は、「前件と後件の間に実は差がない」ということが文の伝達上の主目的であり、それをレトリックとして提示することが No more A than B 構文の特徴である。そのため、次の(19)のように、事前想定における前件と後件の位置関係が逆の場合も、No more A than B 構文の事例（かつ、「クジラ構文」の拡張例）として認可される。

(19) Drinking a 1.5 L bottle of coke is **no more** fattening **than** eating a bowl of raw sugar.

最後に、先に少し触れた No less A than B 構文も「差がない」ことを表す標識で、レトリックとして機能するのかという問題がある。(1)に対応する有名な文が(20)であり、また(21)も意味的に(20)と類同的な例である。(21)は、図 4 に示した通り、事前想定は「クジラ構文」とは対照的（あるいは対称的）であり、後件の蓋然性は 100 か 100 に近く、それに対し前件の蓋然性は漠然と低いものとして概念化されている。

(20) A whale is **no less** a mammal **than** a horse is.

(21) Eating natto is **no less** disgusting **than** drinking a whole bottle of vinegar.（図 4 参照）

(22) My biases are of course **no more or less** biases **than** those I am going to examine.（BNC）

(23) This was **no more or less than** the truth.（BNC）

(20)や(21)のような No less A than B 構文は、前件と後件の間に差がないことを表す点では同じだが、No more A than B 構文より生起頻度が低く、文レベルの肯定の意味は否定の意味よりインパクトが小さいことから、構文の果たす機能としてのレトリック性はそれほど高くない可能性がある。「クジラ構文」は、実際に繰り返し使用される中で、慣習化を経て、レトリックとして機能する特別な標識としてのステータスを持つものとして定着したのだと考えられる。その中でも形式上特徴的な事例が「狭義のクジラ構文」であるといえる。

また(22)の例は、話し手の「バイアス」が実際の比較対象であるバイアス以上でも以下でもないことを言明しており、とにかく実際のバイアスの程度がどうであれ、それがこれから検討しようとしているものに他ならないことを表している。(23)の例も全く同様であり、認知主体の捉え方がどうであれ、後件の「真実性」がそれ以上でもそれ以下でもないこと、とにかくそれが真実っぽく見えても、その逆でも、それが真実に他ならないことを強調している文である。つまり、more と less が or で等置されることにより、命題（文）の解釈はスキーマ的に、「話し手の解釈がどうであれ、それ以上でもそれ以下でもない」という意味に収斂されるという点において、No more A than B 構文の意味解釈に話し手の命題に対する解釈（捉え方）が反映されることを、逆説的に示しているといえる。

本論では、まず、「狭義のクジラ構文」と「クジラ構文」を定義した上で、その意味的な特徴を示し、本多(2017)のいう「事前想定」とそこで作用する「認知操作」という２つの概念を意味構造図の記述を通して明示化するに伴い顕在化する２つの概念上の差異に応じて、「クジラ構文」から拡張した No more A than B 構文の事例や、No less A than B 構文として具現化する例までをどのように捉えたらよいのかを示した。また、No more A than B 構文の意味と機能を動機づけるのは、[A]や[B]として提示される内容を話し手（あるいは聞き手）がどう捉えるかという「認知」の仕方であることを明らかにした。

---

[1] BNC を用いて no more*than の共起検索を行った結果である。通常とは異なり、No more A than B の形式が文頭に現れる場合（77 例）は省略している。また、A に当たる要素が脱落した[no more than]のチャンクは 1,930 例見られた。

[2] 「差分スロット」とは、平沢(2014: 202)において「比較級の直前に数量を表す語句が置かれ、比較されている二者のレベルの差分が表されることがある」と述べられている通り、例えば以下の例に見られる‘six years’という年齢差を表す名詞句のことである。

(i) He was <u>six years</u> older than I was, and I regarded him with reverence.

[3] 本多(2017)では、「前件否定」「前件抑制」「後件指摘」の例を「No more A than B 構文」ではなく「クジラ構文」と呼んでいるが、本発表の定義では、これらに相当するのは前者である。

[4] 事前想定は、図の中段中央の太線で囲まれたボックス内で、尺度上に位置づけられた二つの小さい長方形のボックスとして表示されている。

[5] インフォーマントは Andrew Wilson 氏(オーストラリア・男性・20 代)である。

＜主要参考文献＞

Hilpert, Martin. 2014. *Construction Grammar and its Application to English*. Edinburgh:Edinburgh University Press. / 平沢慎也. 2012.「「クジラ構文」の「構文」としての意味はどこにあるのか」『英語語法文法研究』第 19 号, 50-65. 東京:開拓社. / 平沢慎也. 2014.「「クジラ構文」はなぜ英語話者にとって自然に響くのか」『れにくさ』(3), 199-216. 東京大学. / 廣田篤. 2017.「「クジラ構文」の意味構造と認知的な特徴に関する一考察」『人間社会環境研究』第 34 号, 65-75. 金沢大学. / 廣田篤. 2018a.「レトリックとしての No more A than B 構文」『ことばのパースペクティヴ』248-259, 東京:開拓社. / 廣田篤. 2018b.「「クジラ構文」の類型に関する構文分析」 *Kanazawa English Studies* 30, 76-92. 金沢大学英文学会. / 本多啓. 2017.「クジラの公式の謎を解く」『神戸外大論叢』第 67 号, 59-88. 神戸市外国語大学. / 柏野健次. 2012.『英語語法詳解－英語語法学の確立へ向けて－』東京:三省堂. / Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford:Oxford University Press. / Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin・New York:Mouton de Gruyter. / Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. [澤田治美(訳). 2000.『認知意味論の展開』東京:研究社.] / 八木克正. 2015.「比較構文と同定イディオム－no more…than の本質－」『英語語法文法研究』第 22 号, 167-182. 東京:開拓社. / 山梨正明. 2000.『認知言語学原理』東京:くろしお出版. / 山梨正明. 2015.『修辞的表現論－認知と言葉の技法－』東京:開拓社. / 山梨正明. 2017.『自然論理と日常言語－ことばと論理の統合的研究－』東京:ひつじ書房.

＜例文の出典＞

British National Corpus（http://bnc.jkn21.com/）